



2016年6月

Yale School of Public Health

Department of Epidemiology of Microbial Diseases

Ph.D. Program

塩田 佳代子

留学前報告書

1. 留学及び Ph.D.進学を考えた理由

私が留学を真剣に考え始めたのは獣医学専攻の3~4年生の頃です。小学生の頃南アフリカ共和国に住んでいたことがきっかけで、獣医師として国際的な仕事がしたい、感染症対策に関わりたいたいという漠然とした夢は持っていたのですが、具体的に何がしたいのか描けずもどかしく思っていた頃でした。そんな中、公衆衛生学や疫学の講義を受け、国際機関や政府機関、大学などの研究機関がどのように協力して感染症をコントロールしているのかを知り、「これだ!」と思いました。疫学者として感染症対策に貢献できる人材になろうと決意し、最先端の知識と経験が得られる大学に留学することを決めました。

獣医学課程6年生の冬にアメリカ、イギリス、フランスの大学院に出願し、最終的に Emory University の School of Public Health (公衆衛生大学院) に留学することにしました。2012年8月から2014年5月まで在籍し、専門学修士号の一つである Master of Public Health (MPH、公衆衛生学修士) を取得しました。途中タイにある World Health Organization (WHO、世界保健機関) のカントリーオフィスでインターンをし、現場で集めたデータを解析し修士論文に仕上げることができました。卒業後は奇跡的に米国連邦政府機関の Centers for Disease Control and Prevention (CDC、米国疾病管理予防センター) に採用して頂くことができ、感染症疫学者として勤務して2年になります。

アメリカでの4年間はまさしく嵐のようでした。順調にいくことなどほとんどなく、本が何冊も書けそうなほどトラブル続きの日々でした。英語も渡米前よりましになったことは確かですが想像していたようには上達せず、自信や自尊心は粉々に打ち砕かれました。特に最初の2~3年は精神的にも金銭的にも余裕がなく、毎日のように日本に帰りたいたいと言っていたような気がします。それでももう少しアメリカで修行しようと思えたのは、「疫学者として感染症対策に貢献できる人材になる」という夢に向かって一步一步前進し、積み上げていくことの楽しさを実感

し始めたからだと思います。その過程で自分に足りない知識や経験がより明確に見えるようになり、そのギャップを埋めるためにはラスボス (i.e., Ph.D.) を倒すしかないと思ったので、再度大学院に戻る覚悟を決めました。各種感染症の伝播動態やその対策効果を数理モデルを活用して比較し、それぞれの地域や集団に最も適した対応策を提案できる研究者になるため、Ph.D.コースでトレーニングを積みたいと思っています。

2. 合格するために実行したこと

前に述べたように私は2011年～2012年の冬に海外大学院出願を経験しており、今回は二度目の挑戦でした。また渡米後毎年数人の出願をお手伝いさせて頂く機会があったのですが、それらを通じていつも思うのは「全員に通用する基準や戦略はない」ということです。日本の大学入試は点数が全てなので、合格基準がシンプルでわかりやすくフェアだと思います。一方アメリカの大学院で合格を勝ち取るためにはTOEFLやGREで高い点数を取るだけでは足りません。逆に言えば低い点数でも合格できる人はいます。合格基準が曖昧で、こうすれば受かると100%言い切れる戦略はなく、どうしてこの人が？と思う人が合格だったり不合格だったりします。つまり、こうしてインターネットで得られる情報は参考程度に捉え、自分に合った戦略を考え選択することが重要です。

以下、参考までに二度目の出願で私が取った戦略をご紹介します。一番のポイントは、**出願校を絞って徹底的にアピールする**ということです。感染症疫学で有名な大学院はアメリカに数多くありますが、私は今回5校に絞って出願することに決めました。そして各大学の教授、ポスドク、学生、卒業生に5～6月頃からコンタクトをし始め、Ph.D.進学に興味があることや、これまでの経験と今後やっていきたいことを伝えました。うち4校には夏から秋にかけて訪問し、研究プロジェクトやPh.D.プログラムの構成などについて詳しく知る機会を作りました。学会では志望校から来ている人がいないか探し、会う時間を作ってもらいました。同僚やこれまでの指導教官・共同研究者の中に、志望校の教授らとの共通の知り合いがないか探し、彼らを通じて紹介してもらったり非公式の推薦メールを送ってもらったりしました。こうして約半年かけて少しずつ輪を広げたおかげで、面接の時点では既にほとんどの先生や学生と面識があり何度も話したことがあったので、とてもリラックスして臨むことができました。

CVを見れば一目でわかるような輝かしい業績を持っている人は、このように時間と費用をかけてネットワークする必要はないのかもしれませんが。しかし私のように他の出願者とあまり差がつかないことが予想される人は、積極的に動いて自分のことをよく知ってもらうことは有効です。アメリカの大学院には世界中の優秀な人材が多数出願してくるので、選考過程を経ていく

中で優劣をつけがたい人のグループは必ずできてしまいます。前述のように日本は点数でシンプルかつフェアに決めますが、アメリカはそうではないです。「こっちの子を取ろう」と思わせるにはどうするか。出願書類だけでいくらアピールしようとしても、エッセイには語数制限があり、推薦状も3通までしか出せません。そこで私は徹底的にアピールして自分を知ってもらおうという戦略を取りましたが、他にも方法はいくつもあると思います。世界中の優秀な人材と戦って勝利を得るために、自分に合った手段を見つけて実践してください。